
桜並木の下の道

滝仲 夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜並木の下の道

【Nコード】

N6707C

【作者名】

滝仲 夕

【あらすじ】

僕が帰省した時に幼馴染みの裕子に偶然出会う昔と唯一違うのは裕子のはめた指輪だけだった

それは僕が地元へ帰省した時だった

その日は暗い雲が空を覆いあたりの空気を暗くしていた

「もしかして春野くんじゃない？」

驚いて振り向くとそこには懐かしい面影の幼馴染みがいた

呼び止められたのは桜の木が立ち並ぶ、綺麗な道を中心だった

「裕子？」

僕が驚きつつもそう言う彼女は嬉しそうにうなずいた

手を振りながら歩いてくる彼女はまるで、僕の記憶から飛び出して来たかのように昔と変わらぬ姿をしていた

はき古したGパンと何かはわからないがプリントの入ったTシャツのラフな格好

黒く肩の辺りまでまっすぐ伸びた髪が手を振る度に左右にゆれた

ただ唯一違うのは左手に光る指輪だけだった

僕は彼女に手をふりかえした

「久しぶりだね 元気だった？」

彼女は昔と変わらない元気の良いハキハキとした声で話しかけてきた

その変わりのなさが嬉しい反面、どこか切なかった

僕はその切なさを彼女に悟られぬように用心しながら、わざと明るい調子で彼女に話しかける

「よお こっちはまあまあ元気でやってるよ そっちはちゃんと主婦やってんのか？」

あはは 彼女はそう控え目に笑うと恥ずかしそうに頭をかいた

「まあ 一応頑張ってますよ 知らないだろうけど大変なんだよ？ 主婦業ってやつは」

「ハハ そりゃ知らねえな」

どこか複雑な心境の中で僕は笑った

彼女が笑った時にできる 右頬のエクボは昔と変わってなくて、互いに笑い合うこの瞬間だけ 昔に戻ったみたいで少し幸せだった

彼女と僕はいわゆる幼馴染みでその上腐れ縁という実近い距離で生きてきた

小さいころからまるで姉弟のように育って、毎日のように笑い合い、時々本気で喧嘩した

僕は裕子が今まで付き合った人全てを知っているし、裕子は僕が付き合った人を全て知っている

僕は裕子を妹、もしくは姉のように思っていたし、彼女もきっと僕を弟か兄のように思っていただろう

ずっとこの関係が続いていく

僕はそう考えていた

それは高校三年の時の帰り道

今にも雲が落ちてきそうなほどの曇り空の日だった

その日の帰りに担任から進路希望調査票が配られた

高校三年ともなれば当然の行事だし　僕はその薄っぺらい紙で将来が決まるなんて信じられなかった

「どうする？　これ？」

僕はカバンの中から薄っぺらいアンケート用紙を取り出して、しばらく眺めた後　丸めて自分の頭を叩いた

「こんな薄い紙切れで自分の将来が決まるなんて　信じられないよな」

正直　将来のことなんてまるで考えてなかったし　今がずっと続けば良い　そう思っていた

「あたしね…」

裕子は何か言いにくそうに、うつむきながら口を開いた

「製菓学校に行こうと思ってんだ」

「マジ？」

僕は本気で驚いた

今まで裕子からそんな話を一度も聞いたことがなかったし、結局は僕と同じ学校に行くのだろうと漠然とそう考えていた

「いつもの思いつきか？」

僕がそう聞くと、裕子は頭をかきながら照れくさそうに答えた

「いやいや 昔からの夢っスから …辞めた方が良い？」

裕子は急に真剣な顔になった

今度は僕が頭をかいた

いつも笑うか怒っている表情しか見たことのない裕子の真剣な顔は何だか綺麗で緊張した

「頑張れよ そして旨いお菓子を食わせてくれ」

裕子の前で僕は笑った 無理矢理に笑顔を作った

正直言って、裕子には行って欲しくなかったし、行かないでくれ
と大声で引き止めたかった

ずっと一緒にいたかった

心の中ではいろんな感情が渦巻いているのに、

それを表に出せなくて僕はただ笑うことしかできなかった

「んじゃ 頑張ってみますかね」

そう言って裕子は うーん… と大きく伸びをした

それから数か月後、裕子は無事合格が決まり、それと時を同じくして僕はごくありふれた普通の大学に合格した

離れ離れになって始めの頃は連絡を取り合っていたが、

忙しさもあってか段々裕子とは連絡をとる回数が少なくなった

そしていつしか連絡をし合う習慣は消えてなくなり 夜空に散った

その後、裕子が婚約したと風の噂で聞いた

ほとんどクラス会に顔を出すことのない僕はその事実を確かめることはできなかった

いや 本当はその事実を確かめることが怖かったのだ

「なんか不自然だよねえ」

「ん 何が？」

僕は我に返って裕子を見た

彼女は空を見上げながらどこか感慨深い面持ちで言った

「あたしらずっと一緒だったじゃん？ そんなでさ たぶん死ぬまで一緒にそれが自然だと思ってたんだよね」

そう言うのと裕子は照れくさそうに笑った

僕も笑いながら わざと冗談っぽく

「僕もだよ それが誰かさんがパティシエになるって言いだしてしかも結婚なんかするから…」

僕は頭を抱えるふりをした

「ごめんごめん でもさ 春野が 「行くな一緒にいてくれ」て一言言ってくれば良かったんすけどね」

彼女は鼻頭をポリポリかきながら言った

僕は裕子の思わぬセリフに動揺しながら

「アホッ そんなこと言うとお前の旦那に怒られるだろ」と冗談っぽく笑った

しかし彼女は笑うことなく ただただそらを見上げるだけだった

ふと彼女は左手にはめた時計を見ると

「しまった 遅刻だ」

と首筋を人差し指でかいた

「頑張れよ」

「うん」

僕がそう言うのと裕子は昔の笑顔のままでうなずいた

「それじゃ またね」

そう言うのと裕子は走って行ってしまった

今裕子が言ったことが本当なのかはわからない

けれども裕子と過ごした日々は幸せだった

それだけはウソはないだろう

空を見上げると雲の切れ間から 優しい光が降り注いでいた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6707c/>

桜並木の下の道

2010年10月13日15時47分発行